

世も心とせましくなりはけきむして業する身こそかなしむ  
併しなけれを濟す

なにもものもなくす心

世の心やすまよ

思ひなす心からなる身のうちを

◎ 自隱 轉法捷徑

世のしがとのみかこちぬるかな

あわれみをもものはせこそす

心よもほかにほとけの

そがたやほある

心こそ心まよわす心なれ心の駒よ心まかすな



師 畫 工 如 者 也 心



村民の長殿千秋万歳子孫繁昌御祈禱の謎々  
桶屋の正直なに

深山の熟柿なに  
長殿の御家とはどうじゃ  
はて村を削りとるはらうて

白隠 轉法捷徑

ちよんがれぶし

果は皆人知らず残らすつぶれて仕舞ふて井戸がわ残る程  
によ近頃申悪くけれど長殿はめでたおりやらぬよ  
若し村民の長たらんぞ人々は毎日此謎を三復せば子孫万歳  
目出度がるべし來世に付けてもさ

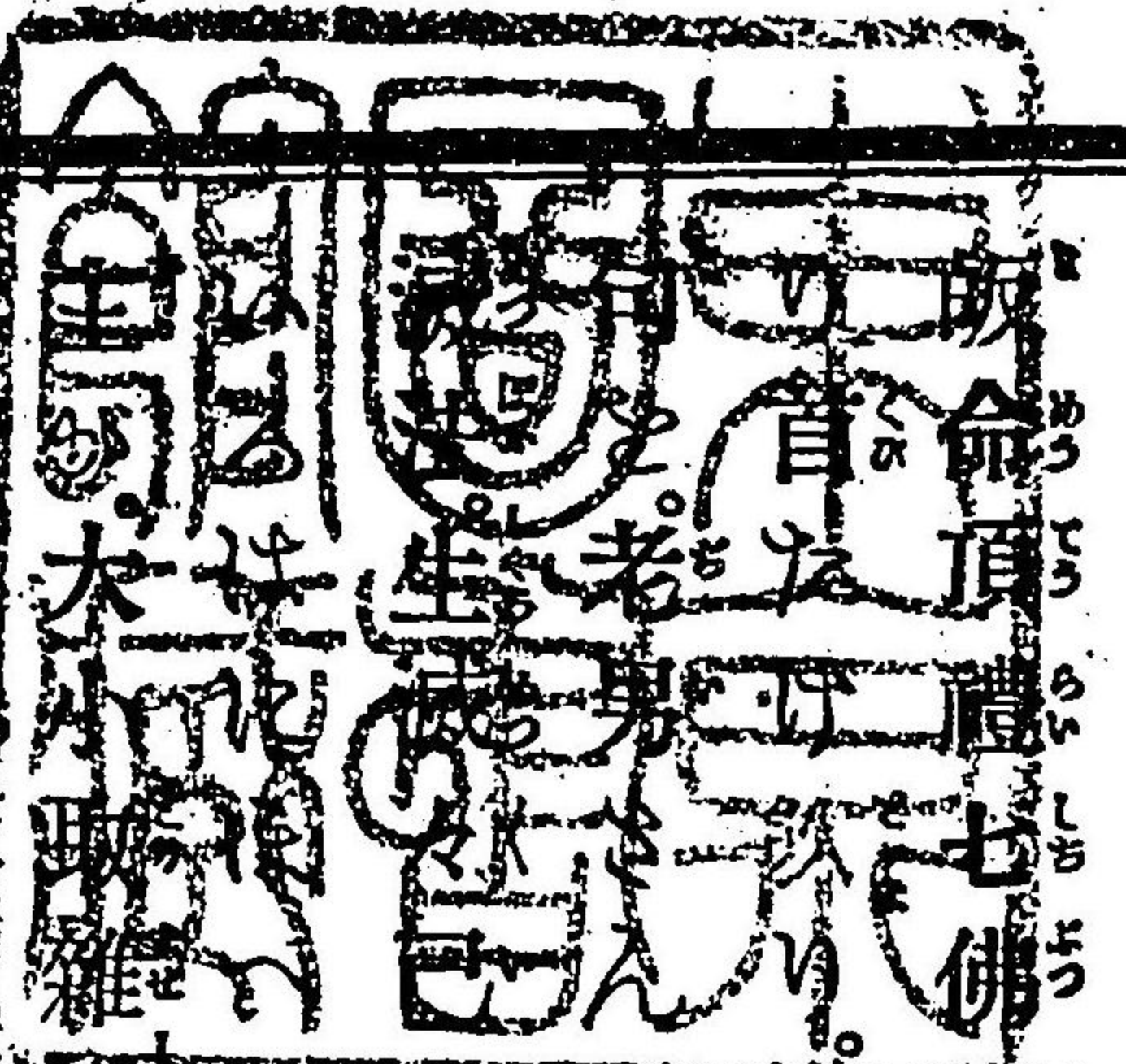
白隠 轉法捷徑



皈命頂禮七佛傳來我等の親玉釋迦牟尼如來も僅と聽よ  
り首たげ飲り戀にこがれて命も抛ち肝心要の小歌の文  
句と老男さん老女さん皆様聞ナイ諸行は無常じゃ是生  
滅法生滅々己で寂滅爲樂と有てもしれぬで弘法大師も。  
いるはにはほへとに解て置れた其でもすめずは樹木連坊  
主が大小取雜をきかんせ眞に浮世は計ないものです。  
人間萬物山でも川でも日月星辰竹木世界も花咲や散ま  
す盈れば虧ます生りや死ます有も無なるるれでも皆  
様千年萬年此世に留居ぞと思てとぞろがうのくする



白隠轉法捷徑



命頂禮七佛傳來我等の親玉釋迦牟尼如來も僅と聽よ  
 老女さん皆様聞ナイ諸行は無常じや是生  
 寂滅爲樂と有てもしれぬで弘法大師が  
 とに解て置れた其てもすめずは楞木連坊  
 人間萬物山ても川でも日月星辰竹木世界も花咲や散ま  
 す盈れば虧ます生りや死ます有もな無なるるれでも皆  
 様千年萬年此世に留居ぞと思てとざるがうめくする





間に無常の嵐が。何處から來やら俄に起と。鬼とを組よな  
 剛機な男も。天人みるよあ美ひ少女も。出息一回止るが堺  
 で。最早傍へもよられぬ容だよ。そこで地水火風の四大は。  
 元へ皈て無なるやふだも。さしひき残て一ツの含藏識一  
 生なしたる善業惡業。是には本より形がないあら。土にも  
 成ねば灰にも成ねば。善業は善所へ惡業は惡所へ。幕が替  
 りて衣裳を着かえ。因縁次第で六ツの衢の。天堂人間地獄  
 や餓鬼趣や。牛にも成たり馬にも成たり。死だり生たり常  
 り無れば。こゝの道理で諸行は無常じや。是生滅法と申た  
 ものだよ。是でも透切安氣はならぬと。佛や菩薩の教にし  
 たがへ。精く進で修行に身といれ。貪瞋痴慢の根を斷枯て。

六道生死の縁が切るれば。これが即ち生滅々己で。こゝに  
 到ると此身がこのまゝ。眞實無相の安閑恬靜月を枕で虚  
 空に安臥。華藏世界を一目に見はらし。身心清淨諸境も  
 清淨寂滅爲樂と有のは此らだ。そこで夫ら御釋迦やあ  
 みだや。觀音地藏と肩臂ならべて。誓願度生の手船に掉さ  
 し。十方世界に神通遊化して。現世は勿論無始劫已來。父母  
 兄弟伯父や伯母の。六趣に迷へる苦患を救て。皆々安樂世  
 界へ導き。生老病死の根も葉も拂て。七寶莊嚴の臺に坐せ  
 しめ。百味の飲食自然と備り。天の羽衣意のまゝにて。天人  
 聖衆と尋常伴ひ。微妙の音樂耳とば慰め。五色の天華を詠  
 て遊ばせ。畢竟は佛にするじやが。何と皆様望はないかよ。



眞更否でも無ならきかんせ。人々御所持の心といふ奴。是  
 ぞと申てしつかと致した。目鼻も手足もごんせぬけれ共。  
 扱々自由なわるめでおじやるよ。佛も生出す地獄もあみ  
 だす。うれじやて皆様油断はならない。先にも云よに無常  
 な浮世で。老男さや老母さは云にも及ばず。若い達者な息  
 子も娘も直に今夜も未來に成やら。どふやらこふやら知  
 ない身の上。浮仮して居ちや不理ものだよ。否でも應でも  
 忽ち此世を。老も若も振捨ゆくのぞ。証知て居ながら余所  
 目に見除て。頭の顛から跟の跡まで。五欲粧ふ心のすがた  
 を鏡に寫さば。二夕目と見られぬ。千万劫にも得難き身を  
 受。人間世界へ生て出ながら。餓鬼。修羅。畜生。地獄の。振舞。起

にも居にも名聞我慢で。朝から晩まで。晩から朝まで。高い  
 も下いも財欲色よく。一心曇にや明るい世界を。眞暗くら  
 く。闇處境界。本來阿彌陀と。同体佛をば。十惡八邪の。不淨  
 をぬり付。渾然。墮爾。汚て仕舞て。我と我手に。地獄をこしら  
 へ。而て皆様御謂ます事には。惡事と申て人。をば殺さ。火  
 付はせまひし。盜は致さ。是等の外には。有まへ。なんど。  
 口さき斗の理屈は。よけれど。見惑思惑の。微細の様子。は。根  
 から葉から。御存知あるまへ。設ひ知ても。行作が。悪けりや。  
 眞坂の時節に用には。立まへ。眞坂と申て。どうした時なら。  
 冥途の方から。使の來た時。理屈で。ゆくなら。何也斯也。言分  
 け。斷り申て。御みやれ。其場。に臨で。四も五も云せぬ。時刻



移ると閻魔の目玉に庇がつん出るなんど、言り忽ち未  
 來へ引立行ぞや。其時皆さる一から十まで。周章騒て胡亂  
 へ廻れど、泣より外には仕様もあるまへ。夫から行さきや  
 如何なる處じや。どふでも大形好事あるまへ。自分懐中自  
 分に証知じや。御臍の下から算用してみて。心で意に異見  
 を御謂やれ。藥を飲ない病人どもには。耆婆扁鵲でも療治  
 はとゞかぬ。夫故佛も縁無き衆生は。濟度は成ぬの無佛性  
 じやの。何じやのか。じやのと呵て置た。無佛性とは如何な  
 る人じやよ。斷見常見世知辨解怠の因果の道理を辨へ無  
 して。三毒五欲の我ま、放埒釋迦の教の十善五戒も。天照  
 太神の六根清淨も。孔子の示の五倫や五常も。擲着没着に

言捨見捨て。用ぬ族を申たものだよ。是等の類が世間に多  
 くて。夫故地獄が野多衢多繁昌。虎の皮をば禪に糾たる。赤  
 鬼青鬼牛頭等や馬頭等や。目にこそ見へ。此身に付そ  
 へ。如何な貴き上々様でも。船士馬子等も。長者も乞食も。惡  
 心邪業の重か輕いか。具に殘らざ鉄牒に記て。毎朝每晚註  
 進致せば。閻魔大王や十王其餘の冥官皆々集り給ひて。御  
 評議極ば命を奪取。娑婆の親子や六親眷屬別を哀み歎も  
 厭わず。さあ來たく。悲畏々々々々。悲畏火の車に引立乘  
 行き。葬津河原で裸にひんむき。裙もさせずに跣で驅たて。  
 閻魔の御前へ引居ますれば。向に立たる淨波梨鏡に。娑婆  
 に居た時身口意三ツで造て置たる罪業殘らざ。分明的然



うつりて見ゆれば。右とも左ともいざこざ云れぬ。うこそ  
 逐一吟味が了れば。夫々役目の獄卒等が請取。一百三十六  
 所の地獄に罪人共らと各々驅ゆき業風烈き爐炭の焰で。  
 天も焦るゝ大流猛火のうづまく鑊湯火坑を構て逐込投  
 込茹たり蒸たり。悉皆割木の燃見るよに黒人まがへに焦  
 たる骸を鉄棒につんざし曳づり出て鉄の白碓にて搗た  
 り抹たり。大盤石にて膏を壓たり。金箔打よに五躰を打の  
 べ。鉄作りの牛にも馬にも犁曳せて鋤わり耕し。或は獄門  
 礫などゝて銅柱に手足を打つけ鉄爪鉄背の鴉や鳶等が。  
 目玉も陰玉も突き啄み。其外無量の呵責の模様は。入寒入  
 熱刀山劍樹や叫喚衆合や黒繩血の池。迷ては出れど死に

や死れど。苦み號て嘯々と泣聲。天地にせまりて震動雷電。  
 其が十日や廿日じやなへどひ。百千万劫晝夜を分たず。ち  
 よつと憩する暇もなへげな。眞に誠に話にするさへ。身の  
 毛が豎て戦慄とするよだ。何と皆様怖は無かよ。扱又修羅  
 や餓鬼趣の苦患は。畜生殘害驚怖の次第は。色々様々語に  
 や盡せぬ。うこそ其よな責苦を受ぬ。罪科の族は此世に  
 居る時。如何様どふした悪業を成ぬ。報じやあらふと思  
 てみさんせ。餘所の身の上計じや有まへ。即人々心の樂屋  
 は。弄玉つかひの手妻を見よに。右から左へ替の早さは。有  
 徳高位の人前銚て。慇懃叮嚀殊勝な目元も。主人や親へは  
 不正な面つき。女房や子供に鼻毛を延すも。脇目に餘り阿



房な様だよ。金借る朝にや。地藏に化たり。戻して呉いと請  
る。夕にや。閻魔も負驢出るな。怒面瞬する間に。總來と替  
りて。僞慢無作法人。とば侮り。詭曲追従。已を欺き。天道化育  
の心に背て。殺生。なんどは無慈悲。極頂物の命で。妻子を  
やしなひ。口に嗜て。我身を娛し。み。設ひ。手づけて。殺し。はせ  
いて。害惱めて。難義をさせ。つゝ。苦み。傷む。と。不便と思は  
す。渠等も。親子や。夫婦は。有のに。我身を。般て。痛さ。も。知れぬ  
か。向の患は。厭わぬ。身づつて。錢金持。ねば。人並ならぬ。の。浮  
世は。渡れぬ。杯と。こゝろに。強盜。逐剝。壁。きら。ない。でも。算盤  
筆。先。不直の。とり。遣。滅。多。野。多。羅。に。強欲。か。は。いて。神のもの  
でも。掠る。分別。先祖。や。主君の。御影も。忘て。一門。朋輩。犬猫。ま

じわり。舅姑。白眼。ば。娶女。も。青髓。不實。不孝の。火と。火と。摺  
合。惡口。雜言。無慚。愧。千万。夫等。が。惚て。二張の。弓。曳。き。や。婦等  
も。持で。両。梃。つ。か。ふ。て。ち。よ。つ。と。脇。から。焼。付。ら。れて。は。胸。を  
燃て。焼餅。や。き。つ。ゝ。火の。手。が。上。れば。忽。狂。亂。折。節。額。に。角。を  
も。生して。縊。溺。死。が。榮。て。も。有。ま。ひ。己。が。邪。見。が。氣。儘。に。なら  
ぬ。と。餘所の。事。迄。讒言。陰言。謗り。謗。られ。互に。腹。た。て。人。と。ば  
落。て。自。分。が。身。揚。り。我。他。彼。此。く。爭。論。諍。恚。恨。が。募。れ。は。截  
たり。伐。たり。博。奕。遊。俠。亂。酒。に。耽。て。親の。命。も。ち。む。逆。罪。  
何。か。ら。何。迄。大。膽。而。已。これ。ら。は。皆。々。惡。趣。の。種。蒔。折。角。過。去  
世。で。善。事。作。た。る。功。徳。の。果。報。で。此。身。は。得。た。れ。ど。死。と。未。來  
は。必。定。地。獄。じ。や。夫。故。佛。は。や。れ。く。ふ。び。ん。や。一。切。衆。生。は



皆是前世の父也母也恩ある族じや何とぞ扶て遣たいも  
 のじやと泪をこぼして勞りたまへど。自業自得の罪科は  
 のがれど心の田地に蒔置種じやて萌切り生出て一粒万  
 倍無間の苦患を受ねばならなへ。それが否なら今日今  
 ら人間根性にきりかへ直して神や佛や聖人君子の教の  
 道理を肯ひ辨ぬ。孝悌忠信獨をつゝし。信心怠り修行を  
 仕ますりや。差て難義な譯でもとんせぬ。魚類の中でも鯉  
 とや申て利發お奴めは禹門の瀧おば。一心勇猛勵てすゝ  
 めば。登りおふせて竜とも成げな。狐も稻荷の鳥居を偏起。  
 飄と飛起しや。神にも成ます。鳩めは苦空無常となへて。  
 三枝の禮義も見事に勤る。雀はちうく。忠義を轉り。鴉は

孝行反饋のやしなひ。折節見なむら御目にもとまらざ。尋  
 常聽ても御耳へいらぬか。鳥類魚類や四ツ足などにも劣  
 と云れちや一分立まい。真から底から立ぬと知たら。憤激  
 起して心入れかへ。皈崇三寶先祖を敬ひ。兩親舅姑に孝行  
 第一。夫婦愛敬別義を守て。昆弟友于の禮容したしく。親類  
 朋友信を闕さざ。貧賤病苦の族を愍み。分限相應家業を持  
 で。國王領主の掟に順ひ。慈悲と正直堪忍三ツを。自身に勤  
 りや。人まで見習。教へず自然と導き進ませ。上下諸とも和  
 き睦ひて。毎も莞々笑てくらせば。佛神天地の御意にも協  
 て。八百万神梵天帝釋。大黒毘沙門御守り給へば。惡鬼邪神  
 は何處へか逃うせ。無病息災延命長久。天下泰平五穀も成



就御家も榮て善子も出ます猶又皆様朝夕忘れど摩訶般  
 若や南無訶羅怛那や南無阿彌陀佛も法蓮華經も皆是無  
 明の根を切刀じや。口から出聲御耳へ入るよに諦々御と  
 なへなさると煩惱妄想追々消はて自然と三昧發得しま  
 して念々佛心佛心念佛こゝと去るに往生淨土じや。また  
 しも近路坐禪が何より望な御方は大善知識に眞實篤り  
 參禪しめされ。こゝていふても畫た牡丹餅聽た斗りて御  
 腹は飽れど水も飲ねば冷暖知なひ。六凡四聖も唯この一  
 心一心悟れば娑婆即寂光一心迷へば即ち三途じや返す  
 くも御由斷なさるな。今にも無常の嵐が起ると暫時待  
 てと云間はごんせぬ次第く一時く後へは遠なる

前へは近なる死で此身はどふなるかふなる平生忘れず  
 覺悟が肝心諸佛菩薩も昔は凡夫じや。どふでも彼衆は覺  
 悟がよかつて万徳圓滿御成就し玉へ衆生濟度が御自由  
 自在じや。然れば各々彼衆を見ならへ寶の山にて空手を  
 振どと自分く覺悟を窮て渴に臨で井戸掘せぬよに。  
 希ぞ皆様この一大事を聽分嚙分打捨をかどと菩提の道  
 とば踏どみ求る御志とば發して給ナヒエ引

右、白陰古佛之感、慈迹竊雜杜撰之長語、添蛇足  
 大罪若使末世狂惡邪見之輩因果信之便也者  
 幸老古佛之呵責復得免乎

天保二年辛卯夏日

老乞士補選



明治廿三年十二月廿九日出版  
同 年 同 月 三十日印刷

編纂

人

佐々木惠雲

京都市油小路北小路上ル玉本町六番戶寄留

發行

人

清水精一郎

京都市油小路北小路上ル玉本町六番戶寄留

印刷

人

木村與三郎

京都市室町通姉小路北へ入圓福寺町十二番戶

發行所

興教書院

京都市油小路北小路上ル



# ●佛 教 或 問

齋藤聞精師著 實價金拾二錢  
第三版 郵税金貳錢

右と東京某伯爵の依頼を以て大洲鐵然師が齋藤聞精師に依頼せられしに因り師が極めて平易に極めて簡短に近世人々の希望せる佛教大乘の義理と數十條の問答を爲し白衣局外の人の爲す著述されたる完全なる大乘佛教問答也解し易き總説の佛書に苦むの際讀者の利益蓋少小は非るべし

# ●改 悔 文 講 話

赤松蓮城師題歌 實價 六錢  
釋 慧晃師述 郵 稅 二錢

それ改悔文と云ふは浄土真宗中興上人信證院殿の著述し玉ふ御詞として一流の教俗安心領解の極致これに攝在せり教行信證の要義この一章に備たり凡夫往生の鏡藻とし之を掲げ玉へり實に真宗の法門を發揚して眞に眞佛土に到らしむるの燈明なり、之を高徳ある釋慧晃師親切に誰にも能く解る體或る法の友の需に應じて講話せし遺稿也言頗る流麗にして大に利を吾人に與ふるを覺ふ、一閱を松島善海師に請ひ印刷に附す願くば中興大師の垂意を汲み日頃我身のわやまれる姿を明鏡の反影に正し改悔の實を現當二世の享福に顯されんとを



2/54  
26/

019788-000-8

特16-315

白隱和尚轉法捷徑

佐々木 惠雲 / 編

M23.12

ABG-0608

